

平成17年度病害虫発生予察特殊報第2号

平成17年9月16日
埼玉県病害虫防除所

チャにおけるクワシロカイガラムシ (*Pseudaulacaspis pentagona*)の発生について

1 発生経過

平成17年6月中旬、農家を巡回の際、県西部地域においてクワシロカイガラムシと思われる綿状のロウ物質が茶樹の基幹部に付着しているのが確認された。埼玉県農林総合研究センター茶業特産研究所で検定したところ、クワシロカイガラムシと判明した。

その後、9月までに周辺地域で同様の寄生が確認され、クワシロカイガラムシによるものであることが明らかになった。

本害虫は、関東より西の茶産地では多発生することがあり難防除害虫となっているが、本県においても今後、発生の拡大が懸念され警戒を要する。

2 形態及び生態、被害

(1) 形態及び生態

成虫の体調は、雌は1.1mm~1.3mm、雄は0.7mm~0.9mmである。雌は楕円形で橙黄色をしていて、直径1.7mm~2.8mmの白い介殻で覆われる。ふ化幼虫は始め活発に歩行するがやがて介殻をつくり基幹部や枝に定着する。口針を刺して、吸汁加害する。

5~6月と7~8月と、地域によっては9~10月頃の、年2回から3回の発生がみられる。雌成虫で越冬する。

(2) 被害

初期は茶樹に外観症状が現われにくく目立たないが、寄生が進むと芽の生育が不良となり古葉が黄変、落葉し枝梢や幹が枯死する場合もある。

基幹部を中心に雄繭がかたまり、白い綿状のものとして観察される。発生が進むと枝全体が綿状物質で白く覆われる。

3 防除対策

(1) 防除適期であるロウ状物質に幼虫が覆われる前のふ化最盛期（5月中旬~6月上旬頃、7月下旬~8月中旬頃の主に2回が効果が高い。3世代目は発生時期がそろいにくいので、1週間後に再散布すると効果が高い）等に、寄生部位を中心に薬剤防除を行う。ふ化最盛期をのがすと、薬剤の効果は落ちるので注意する。

(2) 早期発見に努め、寄生が発見された株は、タワシやブラシ（またはジェットノズルによる高圧洗浄等）などで掻き落とす。

(3) 整枝等の刈取残枝や抜根株を、他の茶園に投入したりしない。

(4) 摘採機や整せん枝機は作業後、枝などをよく掃除する等して、他の茶園に作業による虫の持ち込みを防ぐこと。

(5) さやまかおり等の抵抗性品種を積極的に導入する。

(6) 購入苗については、寄生がみられないか十分注意する。

(7) 県内で発生しているカイガラムシ類の多くは、ツノロウムシかチャノマルカイガラムシでありクワシロカイガラムシとは異なる。

～クワシロカイガラムシ（チャ）の薬剤散布使用例～

薬 剤 名	使 用 基 準 等	備 考 (防除時期等)
スプラサイド乳剤40	1,000～1,500倍液 摘採14日前まで1回	5月中旬～ 6月上旬 7月下旬～ 8月中旬 (幼虫孵化期)
ダーズバン乳剤40	1,000倍液 摘採14日前まで2回以内	
アプロードフロアブル	1,000倍液 摘採14日前まで2回以内、1000 $\frac{\mu\text{g}}{\text{L}}$ /10a	10月上旬～ 11月上旬 (雄繭発生期)
カルホス乳剤	1,500倍液 摘採21日前まで1回	
マシン油乳剤	個々の銘柄により使用濃度や使用時期等が異なる場合があるので、個々の製品の登録内容を必ず確認してください。またチャに登録のあるものを使用すること。	

- ※ 農薬を使用する際はラベルをよく確認して、登録内容にしたがって使用する。
- ※ なお、別途農薬成分毎の総使用回数が制限されるので、十分注意すること。



基幹部に寄生したクワシロカイガラムシ



防除適期のふ化幼虫
(間もなく綿状ロウ物質で覆い隠れる状態に)